



栗林公園の大禹謨碑

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

西 嶋八兵衛の屋敷跡を見た翌朝、同行者は体調を完璧に崩したが、これが最後なので西嶋八兵衛の真筆という大禹謨碑を見に栗林公園へと向かう。栗林公園は紫雲山を借景とする大名庭園で、特別名勝に指定されている。大禹謨碑は縦五八センチ、横二〇センチの川石に「大禹謨」とのみ刻まれた簡素なもので、公園内に建つ商工奨励館の内庭にあるが、もとは現在地より南南西約七キロの香東川に架かる河辺橋北方四〇〇メートル右岸で出土したという。

「大禹謨」とは、中国の『書経』中の篇の名で「禹王の遠大なるはかりごと（計画）」という意味であり、禹とは治水をよくして中国の夏王朝を建てたとされる聖帝のことで、この碑は香東川の締め切り工事を行った際に、西嶋が自ら筆をとり、石に刻ませたという。昭和三十七年に栗林公園へ移設され、発見からの経緯については当時の栗林公園観光事務所長だった藤田勝重氏の『西嶋八兵衛と栗林公園』に詳しい。また、近年では北原峰樹氏等が『大禹謨』再発見』を出版し、この碑の価値を再確認している。しかし、私はこれらに目を通して、大禹謨碑は西嶋が建碑したもので、しかも真筆と言い切ってしまうことに疑問を持った。まず、碑には建碑者や年代を採る手掛りは刻まれていない。裏づけする史料も

ない。香東川の締め切り工事にしてもそうだが。香東川は、もとは大禹謨碑の出土地あたりで東西二川に別れていた。寛永年間に東の流路を締め切つて西側一本にしたのが、西嶋八兵衛であるとされる。しかし、その確たる記録はない。前掲書によれば、著者の藤田氏が、西嶋自筆の文書が残る伊賀上野の識者に筆跡鑑定を依頼したところ、郷土史家のお墨付きを得た。藤田氏自身も伊賀に出向き、西嶋の筆跡が「大禹謨」に酷似すると確信したという。

しかし、写真や拓本で見える限り「大禹謨」の文字は、藤田氏が述べられているように「非常な気品と味わいをもってわれわれに迫るものがあるのは余程の神技」と言うほどのものか疑問であるし、そもそも筆跡鑑定のみではあまりに心もとない。

また、「大禹謨」の意味からすれば、生駒家の客臣に過ぎない西嶋が、自ら手掛けた工事を「聖帝の計画」などと自賛するだろうか。もっとも、『書経』の「大禹謨」篇は、まだ臣下だった禹が、時の帝に対して人民の生活を豊かにする政治を進言する内容となっている。大禹謨碑は藩主生駒家に対するものという意見もあるが、むしろ、香東川の締め切り工事を、禹王のはかりごとになぞらえて、第三者が顕

彰した碑と考えたほうが自然ではなからうか。さて、栗林公園の門をくぐると、なんと商工奨励館が工事中で、内庭にある碑を見ることが出来ない。よっぽど関係者に交渉しようかと思ったが、同行者の体調を考えると、それではばかられる。おまけに雨まで降ってきた。まったく無念ではあるが、これも「ぶらり旅」の醍醐味と開き直り、讃岐の旅を終えることとした。



工事中の商工奨励館（2015年5月7日撮影）

[交通] 栗林公園までは、琴電琴平線の栗林公園駅より徒歩約7分